研究目的

目的１　「教師の実践的力量形成」に資する大学院のカリキュラムをつくる

■ 教育実践研究が直面する課題

鳴門教育大学大学院では，院生の実践的力量を形成する中核科目として，平成13年**「教育実践研究」**を立ち上げ，これまで一定の成果を上げてきた。

本科目は，教育現場のニーズに応じて研究課題を設定し，現場の教員と現職派遣の院生を中心とする大学院生が協働で課題解決にあたることを目的としたものだった。しかし，近年では現職派遣の院生が減少し，いわゆるストレートマスターの割合が激増している。さらには，教員免許をもたず，大学院ではじめて教職免許の取得をめざす「学校教員養成プログラム」の履修者が全体の４分の１を占めるに至っている。本科目を立ち上げた時期とは，**教育環境が大きく様変わり**した。当初のねらいを達成するだけの条件が失われ，**授業は形骸化**の一途をたどる。教職大学院の準備も進んでいる現在，**「教育実践研究」を発展的に解消・再編**することが，緊急の課題となっている。

■ 教育実践研究の改善をめざして

減少としているとはいえ，現職派遣の院生が一定数存在することは，鳴教大の強みである。**①現職派遣の院生**，**②既に教職免許を取得し，教員をめざす院生**，**③教職免許の取得をめざす（教育実習の経験さえない）院生**，これら立場や経験を異にする**三者が学びあい**，それぞれの**ニーズにきめ細やかに対応**しながら，教師としての力量形成を支援してゆくことが求められている。

目的２　「教科の学びの本質を伝える」ことのできる力量形成をめざす

■ 今求められている教師の実践力＝授業力

立場や経験を超えて，どんな教員に求められる基礎的な力量とは，一にも二にも，**「授業力」**だろう。授業を通じて子どもを惹きつけることのできない教師は，子どもはもちろん，保護者からも信頼されない。逆に，授業がうまい教師は，様々なプラスの副次的効果（学級経営の改善，学力格差の解消など）をもたらすことができる。

■ 教科の学びの面白さ，教科内容の深さで子どもを惹きつける

ここでいう**「子どもを惹きつける」**とは，教科指導を通じて**「分かるよろこび」**を伝えることである。決して笑いや遊びといった一過性の刺激ではない，**教科の本質に触れる面白み**である。社会科であれば，思いもよらない，これまでの常識を突き崩すような社会の本質に接することで，子どもの知的好奇心を揺り動かすことであろう。

そういう授業を行うには，まず教師自身が**教科内容（歴史，地理，法・政治，経済，社会など）について深く知っている**こと，またそれらの概念を子どもが**学習できる形（教材）に加工し，指導できるスキルを身につけている**ことが条件となる。これらの条件を保証するには，物事＝社会の見方・考え方について深い知見を有する教科内容学の担当者の支援が欠かせない。教科内容学と教科教育学が連携し，分かるよろこびを伝えることのできる**授業力の育成**を核に，教育実践研究を再編することが求められている。

目的３　「教育現場との協働」のなかで，教科の学びを究める組織づくりをめざす

■ 教育現場と大学の双方で授業力を育てる

授業力は，授業をすることでしか育成されない。**現場教師と課題を共有し，子どもと格闘する試行錯誤のプロセス**に，教師を成長させる力が宿る。一方で，**授業を捉える科学的な概念・視点**も欠くことができない。自らの授業を分析し批評する理論武装ができたとき，教師は経験則の枠から抜けだし，さらなる成長を遂げることができる。教育現場と大学，どちらにも偏ることのない，双方が協働で教科の学びを究めることのできる組織づくりが問われている。

■ キャリア・ステージに対応した授業力を育てる

教育現場と大学で授業力を育てるにしても，そこで育成すべきものの内実は，院生の立場や経験に応じて異なる。院生の多様化が著しい鳴教大では，とくにこの点が重要。**①教室での指導経験豊かな現職教員**であれば，教室にどっぷりつかるのではなく，むしろそこを突き放し，教科指導の目的達成の視点から冷静に授業を分析・評価し，改善してゆく力（**授業反省力**）が求められよう。**②実習経験のある若いストレート院生**には，小手先の教育技術にのみ依存しないように，教科内容と教材で子どもと勝負できる力（**授業開発力**）を養いたい。**③学校教員養成プログラムの院生**であれば，大学の学問知と現職教員の経験知，そして有効性が確認された教材を活用しながら，子どもと関係を築き，授業を成立させる力（**授業展開力**）が最優先されるだろう。

院生のキャリア・ステージに応じて，授業力育成の目的にも，方法にも違いが出てくる。教育実践研究は，教育現場と大学を往復しつつ，様々なバックグランドをもつ院生が**相互に交わり・学びあい，お互いの力量を高め合う**方向で，再構成してゆく必要がある

研究計画・方法

方法１　ローカル・カリキュラムセンターの基本組織を構想し，ニーズを把握する

前頁 3 つの目的を実現する方法として，**ローカル・カリキュラムセンター**を組織し，そこを拠点に教育実践研究を運営することが考えられる。いわゆるナショナル・カリキュラムセンターは，全国統一基準としてのカリキュラムの開発と普及をめざす。一方，**ローカル・カリキュラムセンター**は，文字通り，地域に根ざした授業づくりのワザと情報を現場と大学で共有，蓄積し，その成果を地域に還元することを意図したものである。

■ 本年度の計画

1）今年度は，パイロット版として**社会科**に限定し，**四国地区・徳島**をターゲットにしたローカル・カリキュラムセンターの**組織と運用をプランニングする**。
2）本プランに対して示唆を与える，国内外の先進的取組（カリキュラムセンターの事例）を調査する。
3）本プランに対する**ニーズを調査する**。とくに現場の教師が授業づくりに関して，どういう情報を求めているか，どのような地域素材の教材化と指導で悩んでいるか，**アンケート調査と聞き取り**を行い，実態を把握する。

方法２　ローカル・カリキュラムセンターの一部を試験運用し，有効性を検証する

ローカル・カリキュラムセンターには，①地域連携と，②多様なキャリア・ステージの院生指導，の 2 機能を付与し，試験運用する。当面は，以下の 3 部門で本プランの有効性を確かめたい。

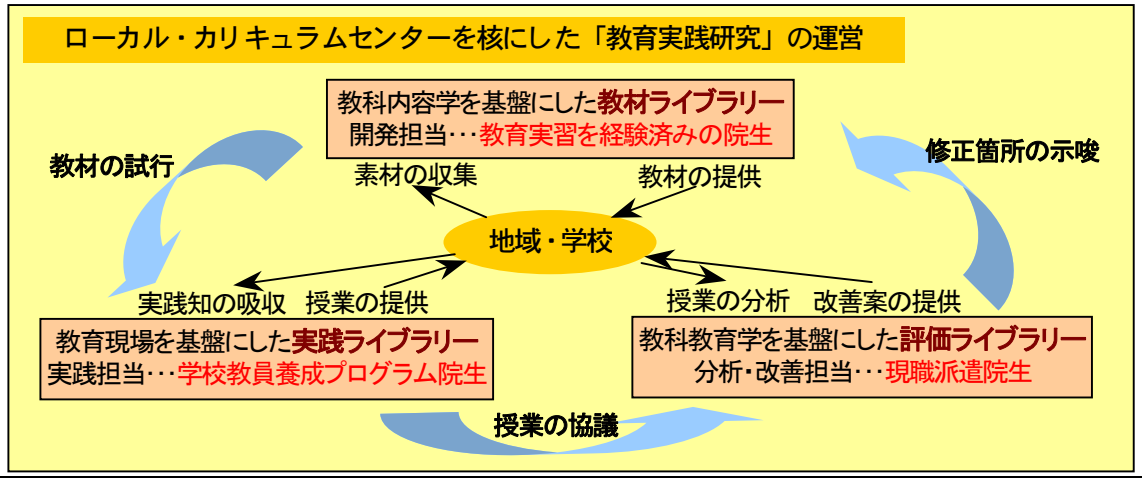
教材ライブラリー：　社会科指導で利用可能な地域のネタや資料を発掘する。また，それを活かした教材（映像，パネル，ワークシート，副読本など）を開発し，ウェブ上で検索，試用できるようにする。

実践ライブラリー：　現場の要請に応える形で，地域教材を活用した授業を行う。また，その実践記録（映像，指導案，学習成果など）を収集し，ウェブ上で閲覧できるようにする。

評価ライブラリー：　地域教材を活用した授業の成果を評価する。授業の組み立てと子どもの学びの姿を分析するとともに，授業改善に向けた議論と提言をとりまとめ，記録に残す。教材別につくられたカルテ（授業分析と改善案）は，ウェブ上で書き込んだり，閲覧できるようにする。

■ 本年度の計画

1）教材ライブラリーに入れる教材を，3 点程度，試行的に開発する。今回は，地理学，日本史学，西洋史学，法律学の視点・方法を活かして，四国の諸事象（例えば，交通，遍路，塩田・藍作，ドイツとの関わり，地方財政，自治制度，判例・事件）の教材化をはかりたい。なお，本ライブラリーは，**教科内容学の担当者**が企画・運営する。実際の教材開発は，おもに**既に教職免許を取得し，教員をめざす院生**がおこなう。
2）実践ライブラリーに入れる授業を，数点，試験的に収集する。今回は，開発した教材のうち，少なくとも 1 つを実践にかけるとともに，それを記録に残すフォーマットを確定する。本ライブラリーは，**現場の教員と教科教育学の担当者**が企画・運営する。実際の指導と記録づくりは，おもに**学校教員養成プログラムの院生**がおこなう。
3）評価ライブラリーに入れる記録を，数点，試験的に執筆する。今回は，地域教材を活用した授業の分析・改善を試みるとともに，それを評価する視点を構築する。本ライブラリーは，**教科教育学と教科内容学の担当者**が企画・運営する。実際の授業分析と改善案づくりは，おもに**現職派遣の院生**がおこなう。
4）3つのライブラリーを，下図のように，**大学と現場の連携の場**，ならびに**院生相互の学びあいの場**として運営する。教育実践研究を，3つのライブラリーの**成果を寄せ合い，発展させる学びのプロセス**として試行する。



研究業績

■ 研究代表者

草原　和博（社会科教育学）

○ 『地理教育内容編成論研究－社会科地理の成立根拠－』風間書房，2004 年（単）
○ 「比較授業研究としての「教育実践研究(社会科)」－学部・附属の連携構築の一試案－」『鳴門教育大学授業実践研究－学部･大学院の授業改善をめざして－』第 2 号，2003 年（単）
○ 「社会科教育実践力を育成する教科教育法の構想－教科と「総合的な学習の時間」の違いをふまえて－」『教科教育学研究』第 22 集，2004 年（共）
○ 「地域の規模に応じた調査における「メタ・ジオグラフィー学習」の試み」『鳴門教育大学情報処理センター情報教育ジャーナル』創刊号，2004 年（単）
○ 「地理的視野に立つ日中相互理解の教材開発－「市場経済移行国：中国・ロシア」－」『日中相互理解のための教材開発に関する基礎的研究』日本教材文化研究財団，2004 年（単）
○ 「地理教育のカリキュラム編成の理論と構想」溝上泰編著『社会科教育実践学の構築』明治図書，2004 年（単）
○ 「学部教育の立場から見た遠隔授業観察システムの利用可能性」『鳴門教育大学情報処理センター情報教育ジャーナル』第 2 号，2005 年（共）
○ 「市民社会における地理教育－テキサス社会科と『世界文化と地理』を手がかりに－」『中研紀要教科書フォーラム』中央教育研究所，No.4，2005 年（単）
○ 「社会科学科地理としての社会科授業」社会認識教育学会編『社会認識教育の構造改革』明治図書，2006 年（単）
○ 「社会科授業実践の基盤となる授業分析力・教材解釈力の育成－遠隔授業観察システムを活用した演習の一事例－」『鳴門教育大学情報処理センター情報教育ジャーナル』第 3 号，2006 年（単）
○ 「教科教育実践学の構築に向けて－社会科教育実践研究の方法論とその展開－」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科編『教育実践学の構築』東京書籍，2006 年（単）
○ 「社会科の思想的基盤－個（わたし）と共同性（わたしたち）をどうとらえるか－」原田智仁編『“国民的アイデンティティ”をめぐる論点・争点と授業』明治図書，2006 年（単）
○ 「地理教育の社会化－わが国の地理教育変革論の体系と課題－」『社会系教科教育学研究』第 18 号，2006 年（単）。

■ 研究分担者

原田　昌博（西洋史学）

○ 『ナチズムと労働者―ワイマル共和国時代のナチス経営細胞組織』勁草書房，2004 年（単）
○ 「1932 年 11 月のベルリン交通ストライキとナチス経営細胞組織」『西洋史学』205 号，2002 年（単）
○ 「ナチス経営細胞組織の成立に関する一考察-その組織的性格をめぐる視角として」『史学研究』239 号，2003 年（単）
○ 「ナチズムに関する歴史教科書記述と研究の現状」『安田女子大学紀要』32 号，2004 年（単）
○ 「ナチズムと公共性論」『安田女子大学紀要』33 号，2005 年（単）
○ 「「赤いベルリン」とナチズム」佐藤眞典先生御退職記念論集準備会編『歴史家のパレット』渓水社，2005 年（単）

町田　哲（日本史学）

○ 『近世和泉の地域社会構造』山川出版社，2004 年（単）
○ 「地域史研究の新地平」『部落問題研究』166，2003 年（単）
○ 「一橋領知上方支配と川口役所」塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』山川出版社，2004 年（単）
○ 「高橋家系図とその形成」，塚田孝編『池田下村高橋家文書の調査研究』和泉市史紀要第 9 集，2004 年（単）
○ 「後藤家文書遍路関係史料」『四国遍路の研究Ⅱ』鳴門教育大学，2005 年（共）
○ 「近世和泉の大工組と『働場所』－泉郡を中心に－」『市大日本史』9，2006 年（単）

麻生　多聞（法学）

○ 「憲法と地方自治」『徳島自治　86 号』，2005 年（単）
○ 「政官関係のリアリズム」『早稲田法学』80 巻 3 号，2005 年（単）
○ 「憲法と基地問題」法律時報増刊『続・憲法改正問題』日本評論社，2006 年（単）
○ 「権力分立原理の受容と展開」『鳴門教育大学研究紀要（人文・社会科学編）』第 21 巻，2006 年（単）
○ 「改憲論・皇室典範改正論の問題点」『法と民主主義』2006 年 10 月号，2006 年（単）
○ 「デモクラティック・ピース論の現在的位相」『比較法学』40 巻 2 号，2007 年（単）